Great Expectations における女性、結婚、家庭

高 橋 沙 央 里

1. はじめに

Charles Dickens の後期の代表作の一つである *Great Expectations* が執筆された 1860 年代は、ヴィクトリア朝の暗部が徐々に表面化した時代であったといえる。特に女性、結婚、家庭に関しては、ヴィクトリア朝を支える基盤であった理想の家庭像、そして「家庭の天使」というフレーズに集約される女性像といったものが効力を失いつつあった。ヴィクトリア朝を通じて女性は議論の対象であり続けていたが、1860 年代に至ると既婚・未婚を問わず、教育、法的権利、労働の問題といった様々な側面からの活発な議論がなされ、イギリスにおいて初の組織化された女性運動が登場した。既婚女性の結婚生活における抑圧や、商業化に伴う中流階級の女性の家事能力と子供の養育能力の低下が指摘され、独身女性の存在が女性の場所は家庭であるといった前提を覆し、売春婦の問題も論じられるようになった。女性の道徳的優越を崇拝し、家事能力が万能な女性によって家庭が守られるという考え方は、特に商業化された都市部において幻想と化していったと言える。

「家庭の天使」の代表例とも言われる Agnes Wickfield を生み出した Dickens は、その保守的な女性の描き方で、しばしばフェミニストの批判の対象となってきた。しかしながら、*David Copperfield* が執筆され、家庭小説が流行していた 1840 年代から約 20 年を隔てて執筆された *Great Expectations* には女性、結婚、家庭の扱われ方に大きな変化が見られる。本稿では、社会の不安定さが表面化した時期に、Dickens がどのように女性、

結婚、家庭を描いたのかを、当時のエッセイなどと比較しつつ考察したい。

2. Pocket 家に見られる理想の家庭の崩壊

中流階級における理想の女性像と言われる「家庭の天使」は Coventry Patmore の同名の詩に由来する女性像であるが、それ以前の 1830 年代に多く出版されたコンダクト・ブックによってすでに確立された。Sarah Ellis は 1839 年に "it is necessary for her to lay aside all her natural caprice, her love of self-indulgence, her vanity, her indolence — in short her very self" (15) と女性の役割を主張している。しかしながら、*Great Expectations* が書かれた 1860 年代には「家庭の天使」は虚像となり、中産階級の家庭の実態が明らかにされ、問題視されつつあった。例えば、Elyza Lynn Linton は 1868 年に "Girl of the Period" において中産階級の女性を次のように批判している。

> The girl of the period is a creature . . . whose sole idea of life is plenty of fun and luxury; and whose dress is the object of such thought and intellect as she possesses. Her main endeavour in this is to outvie her neighbours in the extravagance of fashion . . . and as she dresses to please herself, she does not care if she displeases every one else. (340)

経済的に裕福になった中産階級の女性は外見を贅沢に装うことに強い関心を持っており、家事を取り仕切ることや子供の養育といったような、妻として、母としての役割を献身的に果たすような存在ではなくなっていた。

Great Expectations には Pocket 家という中産階級の一家が登場する。Mrs. Pocket はまさしく Linton が批判するタイプの女性である。彼女の唯一の関心は彼女がナイトの称号を与えられた父親を持っていることで、さらにその父親は祖父が准男爵になるべきであったと信じていた。父親は偶然にナイトの称号を与えられただけにもかかわらず、Mrs. Pocket を育てるにあたり、" . . . Mrs. Pocket to be brought up from her cradle as one who

in the nature of things must marry a title, and who was to be guarded from the acquisition of plebeian domestic knowledge”（189）といった信念にそって教育したのである。結果として、Mrs. Pocket はほとんど根拠のない自分の家柄に固執し、レディとして生活することに専念している。Pocket 家の隣人である Mrs. Coiler は Mrs. Pocket について“. . . ‘[Mrs. Pocket] requires so much luxury and elegance —’”（191）と説明している。Mrs. Pocket にとって、最も大切なことは、レディのような外見と態度によって、周囲の人間を自分にひきつけることにある。Pocket 氏がコックの悪事を彼女に告げたとき、彼女が“. . . the cook has always been a very nice respectful woman, and said in the most natural manner when she came to look after the situation, that she felt I was born to be a Duchess”（196）という理由で、このコックの悪事を信じようとしないエピソードからも、彼女の性質を読み取ることができる。

このような Mrs. Pocket の家庭はカオスと化している。まず、第一に Mrs. Pocket の家政能力の低さをあげることができる。Isabella Beeton はコンダクトブックの中で“The treatment of servants is of the highest possible moment, as well to the mistress as to the domestics themselves. On the head of the house the latter will naturally fix their attention; and if they perceive that the mistress’s conduct is regulated by high and correct principles, they will not fail to respect her”（6）と述べて、主婦の役割の中でも重要な事柄として召使達を適切に処理することをあげている。しかしながら、Pocket 家を訪問した Pip は召使達が家の中を支配しているようだと感じ、Pocket 家の召使たちの様子は“it had the appearance of being expensive, for the servants felt it a duty they owed to themselves to be nice in their eating and drinking, and to keep a deal of company down stairs”（190）と描写されている。このような Pocket 家においては、召使達が Mrs. Pocket に尊敬の念を抱くなどということは決してなく、夫人を適当にあしらい続け、家庭内は無秩序な状態である。さらに、Mr. Pocket は

家政の専門家であり、召使と子供の管理に関する彼の論文が最良の教科書と考えられているという設定に、一層の皮肉を見ることができる。

Mrs. Pocket は中産階級における、子供の養育を怠る母親の問題点も浮き彫りにしている。Linton は母親に無視される子供の問題を "The Modern Mother" において論じている。

> [The modern mother] is very sure that nothing improper or cruel takes place in *her* nursery. Her children do not complain, and she always tells them to come to her when anything is amiss; On which negative evidence she satisfies her soul, and makes sure that all is right, because she is too neglectful to see if anything is wrong . . . . Dear and beautiful as all mammas are to the small fry in the nursery, they are always in a certain sense Junos sitting on the top of Mount Olympus, making occasional gracious and benign descents, but practically too far removed for useful interference . . . （269）

Linton によれば、中産階級の女性たちはレディとして生活することに忙しく、母親としての役割を果たすことに関心を持たない。Mrs. Pocket は子供たちが保母たちと遊んでいる時も、子供が針を飲み込んでしまったときも、何事もなかったかのように名士鑑を読んでいる。さらに、隣人から保母が子供たちをいじめていたという手紙を受け取った時、Mrs. Pocket は " . . . it was an extraordinary thing that the neighbours couldn't mind their own business"（190）と嘆くが、彼女は保母達の行為に対して怒りを表現したわけではなく、自分の体面が傷つけられたとして嘆くのである。前述のコックのエピソードからもわかるように、Mrs. Pocket は自身が人の目にレディとして映っているかどうかに関心をよせるあまり、子供が虐待されているという事実に適切に対処することはない。Mrs. Pocket は妻としても母親としても、中産階級の家庭の柱であった「家庭の天使」とはかけはなれた女性である。

さらに、ロンドンで理想の家庭を築くことの不可能性を示すのが、

Pocket 家の息子の Herbert と Clala である。Clara は彼女を虐げる病身の父親に献身的に尽くす「家庭の天使」と言える女性である。しかしながら、この 2 人の結婚においてまず注目すべき点は、Clara は性質的には「家庭の天使」であるが、階級が低いという事実である。そもそも「家庭の天使」という理想的女性像は中産階級における理想像であるが、商業化が進むにつれ、豊かさを増していった中産階級の女性たちは、贅沢な暮らしに没頭し始め、妻や母の役割に無関心になっていった。Mrs. Pocket の息子の Herbert が理想の女性を見つけるには、階級という垣根を越える必要があったのである。さらに、彼らの結婚は小説の中で一種のイリュージョンのように扱われている。Herbert と Clara はロンドンで出会っているが、実際に結婚生活を始めるのは、はるか遠くのエジプトである。都市化され、商業化されたロンドンから遠く離れたエジプトに場所を移して初めて、Herbert と Clara は快適で安らかな家庭を築くことができる。さらに、2 人の結婚生活は詳細に描写されることはない。*Great Expectations* においては、「家庭の天使」によって守られる幸せな家庭というのは、ロンドンという都市においてはすでに実現不可能なものとして描かれているのである。

3. Miss Havisham と Estella に見られる経済的自立と教育の問題

女性の結婚と財産の問題は、ヴィクトリア朝においてもう一つの大きな議論の的であった。1870 年と 1882 年の Married Women's Property Act の成立以前は、上流階級の 10 パーセントの女性だけが父親の財産を equity law によって部分的に相続することができた。この状況下での 1 つの例外が未婚女性である。1860 年代に女性が自分自身の財産を所有するには、equity law を利用できる階級に生まれるか、または一人娘として財産を引き継ぐかしか方法はなかったのである。上流階級の女性として *Great Expectations* に登場する Miss Havisham は法的に認められた唯一の相続人でもあった。彼女には腹違いの弟がいるが、法的に相続人とは認められて

いない。そもそもある程度は財産権を持つことができた上流階級に生まれ、唯一の法的相続人でもあった Miss Havisham は、財産に関してかなりの特権を持っていた女性と考えられる。そして、その特権をどう活用できるかが問題であり、それに関連して女性の教育の問題を考えることができる。

まず、Miss Havisham の結婚における失敗から見てみたい。結婚市場においては、財産は Miss Havisham の最大の魅力となる。Herbert が結婚市場における Miss Havisham の立場について "Miss Havisham was now an heiress, and you may supposes was looked after as a great match"（180）と述べているように、Miss Havisham はその財産のおかげで、多くの結婚相手候補の中から相手を選ぶことができた。しかし、腹違いの弟が財産権を得られなかったことに怒り、友人を使って Miss Havisham に対して結婚詐欺を計略し、その財産を奪おうと考える。この友人について Herbert は "...he was not to be, without ingnorance or prejudice, mistaken for a gentleman"（181）と説明しているが、Miss Havisham はすっかり魅了され盲目的に愛してしまう。結局、巨額のお金を詐欺師に費やし、最終的に結婚式当日に婚約者の裏切りを知った後、Miss Havisham はウェディングドレスのまま、家の中に閉じこもり、時間がその日で止まってしまったかのように暮らしている。結婚市場で有力な立場にありながら、Miss Havisham は相手を選ぶことに失敗してしまうのである。

この結婚における Miss Havisham の失敗は、女性の教育の問題を示唆している。Dinah Maria Mulock Craik は娘の教育に関して、両親、特に父親について次のように問題点を指摘している。

> He delights to give them all they can desire — clothes, amusements, society; he and mamma together take every domestic care off their hands; they have abundance of time and nothing to occupy it; plenty of money, and little use for it; pleasure without end, but not one definite object of interest or employment; flattery and flummery enough, but no solid food whatever to satisfy mind or heart — if they

happen to possess either — at the very emptiest and most craving season of both. （6）

このように、全てを与えるが現実的に役立つものを何も与えないという問題点を指摘した上で、Craik は結果として恋愛以外になにもするべきことを持たない娘が育つと述べ、その恋愛は “a mere delusion of fancy”（6–7）であると考えている。Miss Havisham の父親はまさしく Craik が問題視したタイプの父親である。Herbert は “Miss Havisham, you must know, was a spoilt child. Her mother died when she was a baby, and her father denied her nothing”（179–180）と説明している。誰の目にも明らかに紳士ではない男性を盲目的に愛してしまい、だまされてしまった Miss Havisham の失敗の原因は、彼女が受けた教育にあったと考えられる。Herbert が詐欺師に対する Miss Havisham の反応を “I believe she had not shown much susceptibility up to that time; but all she possessed, certainly came out then, and she passionately loved him. There is no doubt that she perfectly idolized him”（181）と説明していように、恋愛以外に人生の目的をもつように育てられなかった Miss Havisham は自分を愛しているという男性が現れたときから、現実を見ることができなくなってしまう。適切な判断力や知性を身につけることができなかったために、Miss Havisham は結婚詐欺という悲劇を避けることも乗り越えることもできなかったのである。

しかし、Miss Havisham は、養女にした Estella を自身が直面した問題に対処できる女性に育てることに成功する。実際には Miss Havisham は Estella から人間的な感情を奪い、男性への復讐の道具として育てるのであるが、逆説的な形で Estella の中に自己意識を生み出し、それから経済的自立と行動の自由を理解する女性に育てている。彼女が Pip とロンドンで再会したとき、彼女は自分達が自分達自身のお金を持っていないがために、選択の自由を持たないのだと Pip に言う。Estella は自分達が Miss Havisham のお金を使わなければならないのだと主張し、“We have no

choice, you and I, but to obey our instructions”（265）と言う。この主張から、Estella が自分の人生が Miss Havisham の財産によって支えられている以上、Miss Havisham の支配を受け入れざるを得ないと考えていることがわかる。Estella は、自由に行動する権利と経済的自立の関係性を理解している。

Estella にとって養母である Miss Havisham は結婚に必要のないことを教育しない父親と同様の存在である。Estella に与えられた教育の目的は、結婚ではなく、男性への復讐であるが、娘の将来に必要のないことは教えないという教育と本質的には同じである。自分の行動を制限し、自分の人生を支配しようとする養母を Estella は次第に疎ましく思うようになり、Miss Havisham が自分に教えたことがいかに不十分であるかを認識していく。彼女は次のように養母の教育を非難している。

> If you had brought up your adopted daughter wholly in the dark confinement of these rooms, and had never let her know that there was such a thing as the daylight by which she has never once seen your face — if you had done that, and then, for a purpose had wanted her to understand the daylight and know all about it, you would have been disappointed and angry? （306）

Estella は自分が教えられたことがいかに偏っているか、そして結果として自分の人生がいかに制限されてしまっているかに気がついている。そして、Miss Havisham との生活と決別するために Drummle と結婚してしまう。Drummle は結婚に値する男性ではないが、Estella は “Don’t be afraid of my being a blessing to him”（364）と Pip に説明しているように、Drummle との結婚によって幸福になれるとは考えていない。この結婚は Miss Havisham との決別の手段にすぎない。Estella は “a mere delusion of fancy” のような恋愛に夢中になることはない。Miss Havisham は意図せずに、自分が直面した問題を解決することができる女性を育てるのである。

4.　結婚によるハッピーエンディングの消滅

1840 年代の主流であった家庭小説において、主人公とヒロインの結婚は物語のエンディングであり、その後永遠に続く二人の幸福を保証するものであった。しかしながら、家庭の暗部が明るみに出され、同時に未婚女性の存在も注目されるようになるにつれ、結婚だけが幸福なエンディングであるという小説は現実的ではなくなりつつあった。1864 年に Justine MacCarthy は *Westminster Review* に幸福な結婚によるエンディングは非現実的であるとして "The world of most of our British novelists of the present day is really no more like the real world which we all see around us, than the pastoral life of the opera is like the actual condition of the Swiss mountain pesantry"（46）と書いている。Pip と Estella の関係がどのような形で結末を迎えるのかを見ることによって、*Great Expectations* における結婚の扱われ方の変化を見ることができ、世相をどのように反映させているのかを見ることができる。

Great Expectations のエンディングは二つある。"original ending" と "second ending" と呼ばれるもので、出版されているのは Dickens が Bulwer-Lytton のアドバイスを受けて書き換えた "second ending" のほうである。どちらも Drummle との不幸な結婚生活を経験した Estella と Pip が再会することに違いはないが、二つのエンディングは Estella の描かれた方が決定的に異なっている。"original ending" では、Pip と Drummle と死別した後再婚している Estella がロンドンで再会し、Estella は彼女のかつての Pip との関係について後悔を語り、Pip は Estella がかつての自分の苦悩を理解してくれたと解釈するのである。この Pip の見解から、2 人の再会が Pip の報われなかった愛情を正当化させるためのものであると考えることができる。一方 Estella は再婚していることから、経済的自立と行動の自由を知っているとはいえ、その能力を活用していないことがわかる。二人の再会から分かることは、Pip の報われない愛情が救われたということだけである。

一方で “second ending” では Estella 自身の過去からの解放が描かれる。Estella は Miss Havisham と暮らしていた Satis House で Pip と再会し、Drummle との結婚生活を経た自分の変化を次のように語る。“. . . now, when suffering has been stronger than all other teaching, and has taught me to understand what your heart used to be. I have been bent and broken, but — I hope — into a better shape” (484)。この Estella の説明は、Drummle との結婚を経て、彼女が完全に Miss Havisham から自由になり、そして彼女が失っていた ‘heart’ を取り戻したことを示している。Schor は Estella について “[Estella] is wiser, sadder, and funnier than Pip — and who is the character most entirely ‘bent and broken’ by the novel into another form.” (154) と指摘しているが、“second ending” においては彼女は彼女自身の葛藤を克服し、成長を遂げている。Miss Havisham の死後に財産を相続していて、かつ未亡人となっている Estella は、人間的欠陥も克服し、彼女の行動の自由や判断力を活用できる立場となっている。

“second ending” において Pip と Estella は結婚したのかしないのかということは解釈が分かれている。Estella は自分自身について語ったあとに、“And will continue friends apart” (484) と Pip に言う。そして Pip の “I saw no shadow of another parting from her” (484) という言葉で小説は締めくくられる。この 2 人の会話をどう解釈するかによって、2 人が結婚するか否かが分かれる。J. Hillis Miller や John Forster は 2 人が結婚したと結論付けている。Miller は “Pip now has all that he wanted, Estella and her jewels . . . ” (278) と解釈している。しかし、Angus Calder は Pip の言葉を “at this happy moment, I did not see the shadow of our subsequent parting looming over us” (496) という意味合いであると解釈し、2 人は結婚しなかったと考えている。また Jerome Meckier も “[Pip] states that on a specific evening in a specified place, he was unable to foresee another parting — a statement one must certify as truthful regard-

less of subsequent events. Pip divulges all he knew or could have known at the time”（44）と 2 人が結婚はしないと論じている。

当時の *The Athenaeum* に “Most particularly are we grateful for the uncertainty in which the tale closes, as we interpret it. We do not believe that Pip did marry Estella, though there are two opinions on the subject”（45）という書評が掲載されている。意見が分かれていることを指摘しつつも、Pip と Estella は結婚しないと考え、同時にエンディングの不確かさを評価している。先にも述べたように、理想の結婚や家庭といった概念が不確かなものになりつつあった 1860 年代に、幸福な結婚によるエンディングは非現実的なものになっていた。そもそも Estella は結婚を人生の唯一の選択肢として育てられたわけではなく、子供時代から経済的自立と行動の自由の関係を知っていたことや、Miss Havisham の支配に嫌悪感を感じていたことなどを考えると、経済力も自由も手に入れた Estella が再び結婚を選択するとは考えにくい。Pip と Estella の関係が結婚には終わらないと解釈するのが、理想的な結婚というのが虚像と化していた時代にそくしていると言える。そしてまた、二人の結婚の可能性を曖昧にしたこと自体も *Great Expectations* における結婚の描かれ方の特性でもある。

5. 最後に

Great Expectations は理想の結婚、理想の家庭、そして「家庭の天使」という女性像が崩れつつある世界を描いている。世紀の後半になり、商業化された社会で働く人々の道徳心は脅かされ、女性の道徳心や理想とされる家庭像が現実の社会にたいしてもろいものであるということを認識せざるをえない不安感が広まりつつあった。Robin Guilmore は “*Great Expectations* spoke to a generation which was itself acutely conscious of having made enormous advances in the civilization of everyday life; the change in the condition of women reflects in the change of generation of women and also the contradiction of city and country”（123）と指摘している。*Great*

Expectations は家庭小説からはかけはなれたものであり、中産階級における家庭の望ましくない実態、そして財産の問題といった女性の問題を提示し、そしてヴィクトリア朝をささえる結婚像を、特に都市部において、実現不能なものとして描いた。さらに、主人公とヒロインに結婚によるハッピーエンドを用意することができなかった。*Great Expectations* は結婚、女性、家庭の扱い方において、1860 年代のヴィクトリア朝の特徴をあらわす小説である。

引用文献

Beeton, Isabella. *The Book of Household Management*. London: Ward, Lock and Co., 1861.

Calder, Angus, ed. *Great Expectations*. Harmondsworth: Penguin, 1965.

Craik, Dinah Maria Mulock. *A Woman's Thoughts about Women*. Copyright ed. Leipzig: B. Tauchinitz, 1860.

Dickens, Charles. *Great Expectations*. 1862. London: Penguin, 1996.

Ellis, Sarah. *The Women of England: Their Social Duties, and Domestic Habits*. 1938. Uniform Ed. New York: J. and H. G. Langley, 1843.

Gilmour, Robin. *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*. London: George Allen and Unwin, 1981.

"Great Expectations." Microfilm. *The Athenaeum* 13 July 1861: 44-45.

Linton, Elyza Lynn. "Modern Mothers." *The Saturday Review* 25. 644 (February 1868): 268–9.

——. "The Girl of the Period." *The Saturday Review* 25. 646 (March 1868): 339–340.

[MacCarthy, Justine.] "Novels with a Purpose." Microfilm. *The Westminster Review* 82 (1864): 24–49.

Meckier, Jerome. "Great Expectations: A Defense of the Second Ending." *Studies in the Novel* 25. 1 (Spring 1993): 28–51.

Miller, J. Hillis. *Charles Dickens: The World of His Novels*. Cambridge: Harvard University Press, 1958.

Schor, Hilary M. *Dickens and the Daughter of the House*. Cambridge: Cambridge University Press, 1999.